

あぼしまち交流館歴史講座では、年に1回外部講師をお招きして講演会を開いている。今年度は4月21日に、兵庫県立大学非常勤講師の宇那木隆司氏をお迎えして、京極家丸亀藩興浜陣屋の歴史と概要について古地図や史料をもとに、また時折ユーモアを交えながら分かりやすく教えていただいた。

そもそも陣屋とは石高が少なく城を作れない大名の居城か、もしくは飛地にあたる所に築かれたもので、興浜陣屋は後者になる。京極家は宇多源氏佐々木氏の出で、源頼朝の挙兵に従った佐々木4兄弟以降鎌倉時代に多くの所領を有した。京極家の祖は南近江の佐々木氏信で、室町幕府の「四職」家を経て、豊臣・徳川政権の大名となった。寛永14年(1637)京極高和が龍野6万石で家督継承したが、明暦3年(1657)一族の丸亀5万石の山崎治頼が没したので、翌年高和は丸亀6万石に転封となり、うち1万石が揖東・揖西郡28ヶ村のいわゆる飛地となって興浜陣屋が支配することになった。とはいっても実際の行政は各村の大庄屋や庄屋にまかせていたという。

安政5年(1858)の丸亀藩の史料である「西讃府志」によれば、羽柴秀吉が姫路城に居た時の別館であった鶴松亭を陣屋(内郭)として整備したという。ただし広い意味での陣屋とは内郭である藩主の御殿だけではなく、侍屋敷や周りの町も含めると考えられる。藩校明倫館も丸亀城下と同じようにこの外郭にも置かれていた。陣屋の門は現在の金刀比羅神社の辺りにあり、参勤交代の時など藩主もここから出入りした。現在壇尻倉庫のある陣屋門は開かずの門だったそうだ。また西南には角櫓があり、石垣も続いていて城郭のようであるが、石垣は揖保川の土手だという事にして幕府の追及を免れるようにしたらしい。寛文12年(1672)京極高豊は京極家の故地である近江の村と網干の余子浜、大江島の交換を幕府に認められ、余子浜、大江島は幕府領に、新在家は龍野藩領となった。

もともと興浜は天文年間(1532～55)古網干から現在地の辺りに移転したと推定される大覚寺の門前町であった。天正20年(1592)3月27日に羽柴秀吉が大覚寺を訪れたことは確かである。17世紀に本堂などの伽藍が整備され、総門も本来は東向きに建てられていたが、陣屋町の発展とともに現在のように北向きに移築された。大覚寺周辺は丁字路、ノコギリ刃状、鍵の手など戦国以来の道が確認される。つまり17世紀ごろは大覚寺の門前町から丸亀藩の陣屋町として生まれ変わる時期であったといえる。

最後にかつて興浜にあった「松本大明神」の小祠について話をされた。興浜村の魚屋藤兵衛が村人の願いとして安政4年(1857)稲荷本宮(現伏見稲荷大社)から勧請されたものという。正中山(中山法華寺)の祈禱札も祀っている。この小祠は明治政府による合祀令によって今はもうないが、祈禱札や証書などの史料は山本家で厳重に保管されているとのことで、機会があればぜひ拝見したいと思う。今回宇那木先生の講義で印象に残ったのは「歴史は想像である」という言葉だ。過去の人々の残した様々なものからイメージを膨らませることの大切さを学んだ。

網干歴史講座会員 浜田 中川千里

